

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 6 日現在

機関番号：34416

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23730507

研究課題名(和文) 日本型マス・ツーリズムの生成過程におけるメディアの社会的機能に関する実証的研究

研究課題名(英文) Research on social functions of media in the emerging process of Japanese mass tourism

研究代表者

山口 誠 (YAMAGUCHI, Makoto)

関西大学・社会学部・教授

研究者番号：80351493

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近年の観光現象において拡充しつつあるメディア・ツーリズムに着目し、メディア研究と観光研究の知見を有機的に節合して、新たな観光研究のための分析枠組みの構想と事例研究の蓄積を目指した。とくに英語圏の観光研究において豊富な先行研究を有するフィルム・ツーリズムと近年注目されているフォト・ツーリズムの事例と研究に注目し、日本における戦争映画と戦跡観光の事例分析、さらには日本の写真文化と観光の社会的関係について考察を進めた。その結果、研究期間中に12件の学術論文と学術書を発表し、また国際学会での英語発表を含む3件の学会発表を行なった。

研究成果の概要(英文)：This research focused on a growing phenomenon of the media tourism in the contemporary society of Japan. The main aim of the research is to design new frameworks and research methods of tourism studies by linking the knowledge of both media studies and tourism studies. In order to carry on these theoretical tasks, this research scrutinized two concrete fields of media tourism; film tourism and photo tourism. The former related to the war films and visits to war memorial sites, and the latter is to the unique culture and social relationship between tourism and photography in Japan. During the four years of the grant, I could publish twelve papers and three presentations including a talk in the English-speaking international conference.

研究分野：社会学

キーワード：メディア ツーリズム フィルム 写真 通時分析 文化研究 ガイドブック

1. 研究開始当初の背景

(1) 観光研究および観光学を名称に掲げる学会が 15 団体あまり存在する日本において、観光現象をめぐる学術研究は質量ともに活発になっている。しかし日本における観光研究は、観光産業の現場において即戦力となる人材を育成する「観光教育」、または地域再生や社会関係資本の拡充のための一手として観光を利用する「観光振興」の 2 点に集中する傾向があり、いわば産業論的アプローチが主流を形成してきた。それゆえ英語圏の観光研究において注目される、観光現象をめぐる実証的アプローチ、とくに J. Urry や N. Thrift らが先導してきた観光をめぐる「批判的研究」は希少である。

(2) 近年の日本では、アニメ聖地巡礼やパワースポット観光、朝ドラ観光などの「新しい観光」の諸現象が数多く現れ、それら进行分析した研究論文や研究書が発表されつつある。そこではメディアと観光の相関関係が「新しい観光」を読み解くうえで核心的価値を持つこと、とくに 2000 年代以降の観光現象ではメディアと観光が取り結ぶ社会的関係が重要な役割を果たしてきたことが指摘されてきた。

しかしメディア研究の学的蓄積を正確に援用し、たとえばオーディエンス・エスノグラフィや技術決定論批判などの知見を観光研究に応用した日本語の研究成果は極めて少ないため、上述した多くの「新しい観光」の研究が古い「メディア強力効果説」の域を脱していない。

以上から、メディア研究と観光研究の有機的な節合と、それぞれの研究成果を実質的に結合する研究理論の構築と事例研究の蓄積が必要であるといえる。

2. 研究の目的

(1) 上記した研究背景を鑑み、本研究では観光研究における「批判的研究」を日本の文脈で実践すること、メディア研究と観光研究の有機的な節合を図り、近年盛んな「新しい観光」をより実証的かつ理論的な水準で考察できる分析枠組みを構築すること、の 2 点を目指した。

(2) 観光研究の研究対象は多岐にわたるため、本研究では研究代表者がこれまで取り組んできた「メディアと観光の社会学」の成果を応用し、日本において発達してきた特殊な観光の方法を「日本型マス・ツーリズム」と捉え、その生成過程と特徴を通時分析することに研究目標を定めた。この目標を遂行するため、本研究の成果は研究期間中に学術論文や学会発表などで随時公表し、他の研究者の助言や意見を積極的に求め、本研究に反映させつつ上記の研究目的を探求することに努めた。

(3) とくに本研究で着目したのは、テレビ・新聞・雑誌・映画などのマス・メディアと連動して生じる観光現象である。これらは英語圏の観光研究においてメディア・ツーリズム (Media Tourism) と呼ばれ、上述の 2000 年代以降に生じた「新しい観光」の相形として、また現在も日本各地で生じている観光現象の主要な一形態として捉えることができる。

本研究では、メディア・ツーリズムの歴史と現状を具体的事例において分析し、フィールドワークでの現地調査、関係者や観光者への聞き取り調査、一次資料の収集などを組み合わせることで、日本型マス・ツーリズムをめぐる新たな「批判的観光研究」を実践することを試みた。

3. 研究の方法

(1) 研究対象を上述のメディア・ツーリズムに焦点化し、主に英語圏の先行研究を体系的かつ網羅的に収集・読解することで、メディア・ツーリズム研究の研究動向と最新の議論を整理すること、現代日本におけるメディア・ツーリズムの事例を検討し、複数の象徴的事例に対して実証的調査を行なうこと、の 2 点を集中的に取り組みすることとした。

(2) 海外の先行研究を日本の事例へ直接応用するだけでなく、日本の社会状況とメディア状況を考慮した理論の適正化を行なうこと、日本に独自のメディア・ツーリズムの形式を抽出し、海外の研究事例との比較において日本型マス・ツーリズムの特性を明らかにすること、の 2 点を中心的な課題と設定し、研究方法に反映させた。

(3) 具体的な研究方法としては、オンラインで収集できる観光研究の国際ジャーナルを中心に、関連する学術論文および学術書を収集・読解すること、日本における重要事例を選定し、現地踏査、関係者への聞き取り調査、自治体・公共機関・観光協会・商工会議所などの関連団体での資料収集、観光者への聞き取り調査などをあわせたフィールドワークを複数回繰り返すこと、調査対象地に関する観光ガイドブック・定期刊行物・新聞などのメディア言説を国立国会図書館および調査対象地の中央図書館などで体系的に収集し分析すること、の 3 点を中心に行なった。

(4) 研究期間中の文献調査やフィールドワークによって得られた知見は、論文・著作・学会発表などで速やかに公表し、研究成果を他の研究者と共有するとともに、批判や助言を広く求めることで、自らの研究活動を再考し、新たな課題を発見する方法を重視し実践した。

4. 研究成果

(1) メディア研究と観光研究の理論的接合

本研究代表者は、メディア史を主とするメディア研究を専門としてきたため、オーディエンス・エスノグラフィや技術決定論批判などの知見を観光研究へ接続し、メディア・ツーリズム研究において新たな分析枠組みを構想することを試みた。とくに J. Meyrowitz による場所感の変容をめぐる 2005 年の議論（1985 年の no sense of place 論を修正する新たなロケーション論）に注目し、その日本語での紹介と日本の事例への応用を論文「「ここ」を観光する快楽——メディア時代のグローバルなロケーション」(『観光学評論』観光学術学会、1 巻 2 号、2013 年)などで発表することができた。

同論文は複数の研究者により引用されており、また複数の研究会でレビューされる機会を経たため、今後さらに議論を深めていくための知見を得ることができた。

(2) フィルム・ツーリズムの「批判的研究」

映画によって誘発される観光現象（フィルム・ツーリズム）の研究は、英語圏におけるメディア・ツーリズム研究の中心的テーマであり、S. Beeton など多数の研究者が重要な研究蓄積を遂げてきた。

日本でも映画観光の研究は古くから存在するが、その多くは映画研究による作品批評の視点か、映画観客の来訪による観光振興を目指す産業論的アプローチの視点で占められてきた。すなわち映画観光の社会的影響をメディア研究および社会学の視点から分析し、地域共同体や集合的記憶の再構築においていかなる力学が働くのかを、実証的かつ批判的に考察する学術研究は希少である。

そのため本研究代表者は、戦争を題材とする映画とその観光現象に着目し、広島（広島県、2012 年）、板東（香川県、2013 年）、大刀洗（福岡県、2014 年）でのフィールドワークと文献調査を複数回実行し、またそれぞれ計 3 件の図書を研究期間中に発刊することができた。戦争映画は世界各地で製作され、独自のジャンルを形成する題材であるが、それだけに各地域で作品内容だけでなく視聴者層にも偏差がある。日本では比較的若年層が戦争映画を観て、その作品に関連する戦跡へ観光していることが明らかになった。

これらの研究成果では、英語圏のフィルム・ツーリズム研究を視野に入れた日本における「批判的研究」の実践に努めたが、先行研究が膨大かつ多岐にわたるため、必ずしも高次に達成できたとはいえず、後述するように今後の課題として更なる取り組みが必要であることを認識するに至った。

(3) 日本型フォト・ツーリズム研究への着想

日本社会に独自の大衆観光の様式として日本型マス・ツーリズムの考察を進めた結果、上述のフィルム・ツーリズムと高次に連関し、

英語圏において豊富な先行研究を持つテーマとして、フォト・ツーリズム研究があることを研究期間の後半に気付いた。

さらに英語圏の研究成果と比較した場合、日本のフォト・ツーリズムには特有の形式とマス・ツーリズム的要素があり、それはフィルム・ツーリズムやフォト・ツーリズムを含む上位領域であるメディア・ツーリズムの研究において貴重な知見を日本の文脈から提起する可能性を有することが判明した。

とくに日本の場合、世界のカメラ市場の約 9 割を占める機器メーカーが林立し、各社が観光写真コンテストや写真教室やメディア広告などによって「旅と写真」の融合を強力に推し進めてきた歴史もあるため、フォト・ツーリズムは単なる「カメラを持った観光」以上の現象として見ることができる。これは J. Urry が J. Larsen とともに改訂した観光研究の古典『観光のまなざし』（第 3 版、2011 年）において加筆された、パフォーマンスとしての写真観光の議論と密接にかかわる現象である。

同書において Urry と Larsen は「観光はたいていが、写真になりそうところを探し求める行為となった」と述べている。これは現在の日本において適用可能な議論であり、さらに日本独自の観光研究を構想することができる重要な知見であるといえる。

こうした日本型フォト・ツーリズム研究への着想を得ることができた結果、今後さらに先行研究の整理と事例研究の実践に取り組み、新たな観光研究の実現を構想する道筋を明らかにすることができた。

(4) 日本型マス・ツーリズムと戦跡観光

上述したフィルム・ツーリズムの「批判的研究」において、戦争映画と戦跡観光の関係に着目した結果、戦跡観光における「戦争の記憶」の展示と見学の両面において、日本独自の事例が多数あることを発見した。

その第一に、日本の戦跡観光は多くの場合、バス・ツアーや修学旅行や社員旅行などの団体単位で実行されるマス・ツーリズムであること。第二に、広島・長崎・沖縄などの戦跡では訪問者が減少傾向にあるのに対し、2000 年代以降に戦争映画をはじめとするメディアで取り上げられた板東（香川県）、大刀洗（福岡県）、知覧（鹿児島県）などでは訪問者が漸増しており、メディア・ツーリズムの事例として戦跡観光を再考察することが可能であり必要であること。第三に、同じく 2000 年代ごろから展示の方法に変化が現れ、とくに大刀洗では特別攻撃隊（特攻）に関する映画や小説などのメディア言説を引用した展示説明が行われていることである。つまりメディアが「戦争の記憶」を再構成し、メディア化された記憶を訪問者＝観光者が見学する、という特徴的な現象を観察することができた。

このうち第三の論点について、本研究代表

者は国際学会 Asian Studies Conference Japan (2014 年)において英語口頭発表をおこない、米国と豪州を中心とする海外の研究者の意見を聞くことができた。今後さらに日本に特殊な戦跡観光の形式を実証的に分析し、日本型マス・ツーリズムの一類型として捉え、その研究成果を英語で発表することに取り組みたい。

(5) 得られた知見と今後の課題

上記の研究成果はそれぞれ関連しており、いくつかの成果を学術論文や学術書として発表することができたが、しかし今後さらに取り組むべき課題や不足している作業も明らかになった。

まずフィルム・ツーリズムとフォト・ツーリズムの先行研究を読解し、その議論を整理する作業を継続する必要がある。既述のようにフィルム・ツーリズムはメディア・ツーリズム研究の中心的テーマであり、とくに英語圏の先行研究は膨大であるため、この研究期間中にすべての先行研究を読解し、研究領域の全体像を把握することが不十分に終わったという反省がある。他方でフォト・ツーリズムは先行研究が限られているものの、近年とくに研究が活発化しており関連論文が多産されつつあること、また本研究代表者が研究期間の後半に気付いたため時間的制約があったことから、こちらも十分に先行研究を体系化するに至らなかった。メディア研究と観光研究のさらなる有機的な節合を探究するとき、この二つの研究テーマは重要な価値を発揮するものと考えられるため、今後も継続して取り組むべき課題である。

つぎに、フォト・ツーリズムの事例研究に着手し、実証的研究を開始する必要がある。上述したように、フィルム・ツーリズムの事例研究を重ねることで、分析枠組みを構想し、理論的構築を試みる論文を書くことが可能になったため、理論検討と事例分析の往還は重要であり、これをフォト・ツーリズムの研究でも実現することが求められる。現時点ではフォト・ツーリズムの重要な事例を捜索している段階にあり、また先行研究の読解も着手したばかりであるため、今後さらに重点的に取り組む必要がある。

さらに、Urry をはじめとするモビリティ研究(移動研究)の視点から観光現象を捉え返し、新たな観光研究の議論を展開する潮流がイギリスを中心に起こっているため、そうした最近の観光研究の議論を整理して吸収し、日本型マス・ツーリズムの研究に接続して新たな知見を英語等で発信することに今後尽力したい。

<引用文献>

山口 誠、「「ここ」を観光する快樂 メディア時代のグローバルなロケーション」、『観光学評論』観光学会、1 巻 2 号、2013、pp.173-184。

Urry, J. & Larsen, J. (2011) *The Tourist Gaze 3.0*, Sage, London. (加太宏邦訳『観光のまなざし』増補改訂版、法政大学出版局、2014 年)。

5. 主な発表論文等

(雑誌論文)(計 4 件)

山口 誠、「「ここ」を観光する快樂 メディア時代のグローバルなロケーション」、『観光学評論』観光学会、査読有、1 巻 2 号、2013、pp.173-184。

山口 誠、「メディアの文脈から問う」、『メディア史研究』メディア史研究会、査読有、33 号、2013、pp.29-52。

山口 誠、「修学旅行をめぐるツーリズム研究」、『二十世紀研究』京都大学二十世紀研究編集委員会、査読有、12 号、2011、pp.1-19。

山口 誠、「実況化するニュース」、『メディア史研究』メディア史研究会、査読有、29 号、2011、pp.92-117。

(学会発表)(計 3 件)

Makoto YAMAGUCHI, *From War God to Firefly: Remembering Kamikaze (Tokko) in Postwar Japan*, Asian Studies Conference Japan, 2014 年 6 月 21 日、上智大学(東京都)。

山口 誠、「場所とロケーション メディア時代のグローバルな観光と再演性」、『観光学会』、2013 年 7 月 6 日、奈良県立大学(奈良県)。

山口 誠、「旅の終わり、観光の始まり 「後期観光」とメディア・ツーリズムの理論研究に向けて」、『観光学会』、2012 年 7 月 5 日、和歌山大学(和歌山県)。

(図書)(計 8 件)

山口 誠、「メディアとしての戦跡 忘れられた軍都・大刀洗と「特攻戦跡」」、『遠藤英樹・松本健太郎編『空間とメディア 場所の記憶・移動・リアリティ』ナカニシヤ出版、2015、pp.193-212。

山口 誠、「映画観光と住民運動 板東俘虜収容所の再発見」、『遠藤英樹・寺岡伸悟・堀野正人編『観光メディア論』ナカニシヤ出版、2014、pp.19-42。

山口 誠、「ガイドブック」、『大橋建一編『観光学ガイドブック』ナカニシヤ出版、2014、pp.242-245。

山口 誠、「戦争の記憶と観光」、『福間良明・野上元・蘭信三・石原俊編『戦争社会学の構想』勉誠出版、2013、pp.367-388。

山口 誠、「パワースポットの想像力と変容 メディア・ツーリズム研究の可能性」、『遠藤英樹編『メディア文化論』ナカニシヤ出版、2013、pp.97-119。

山口 誠、「「メディアの野球」の歴史に見る可能性と課題」、『黒田勇編『メディア・スポーツへの招待』ミネルヴァ書房、2012、

pp.3-19.

山口 誠、「廣島、ヒロシマ、広島、ひろしま」、福間良明・山口誠・吉村和真編『複数の「ヒロシマ」』青弓社、2012、pp.256-310.

山口 誠、「記憶と忘却」、福間良明・野上元編『戦争社会学ブックガイド』創元社、2012、pp.204-206.

6 . 研究組織

(1)研究代表者

山口 誠 (YAMAGUCHI, Makoto)

関西大学・社会学部・教授

研究者番号：80351493